

科目No.	WT302b		科目名					副題		サイエンス・ワールド・トーク2		
連携機関名	お茶の水女子大学ライフワールド・ウオッチセンター(増田研究室)		レベル	基礎	教室定員	50	配信定員	0	講義日時	火曜日 18:30~20:30	講義場所	早稲田大学西早稲田キャンパス
科目概要	生活の安全保障を考えるうえで、現代社会の成り立ちを幅広く理解することは不可欠である。そして現代社会は科学、技術、産業、経済、教育、文化など多面的な事柄に係わり、かつ、国際的な動きに影響されながら営まれている。そこで健康、農業、食糧、危機管理など社会や世界における諸々の事柄について紹介しつつ現代社会をよりよく理解し生活の安全保障を多様な視点から論じる。											
科目構成	No.	講義名	講義概要					講義日	教室	講師名	所属	
健康・安全と社会	1	安全学という新しい視点から身近な事故を解剖する	安全は、技術だけでは実現できない。安全の理念と共に、安全に直接関与する人間の問題、それを管理する組織や社会的制度の問題など、自然・人文・社会科学にまたがる総合的な学問領域として捉える必要がある。このような分野を安全学として新しく構築することを提案する。そして、安全学の視点から、最近の身近な機械や製品の事故、例えばエレベータ事故や電気製品事故などを検証する。					9月27日	61号館 104室	向殿 政男	明治大学 理工学部教授	
	2	これからの日本を支えるための対「生活習慣病」戦略	生活習慣病は、高齢者のみならず生産性の高い世代をも蝕む。その増加は多くの国でも同様だが、日本には世界最速の少子高齢化があり、医療費の増加以上に労働生産性の減少が危惧される。10年以内の抜本的な対策が必須である。日本が生活習慣病によって、衰退しない方法論について解説する。					10月4日		中島 直樹	九州大学 大学病院 メディカルインフォメーションセンター 准教授	
休 講 日							10月11日					
病気と医薬	3	医薬品の適正使用	医薬品を適正に使用するための添付文書の読み方から患者向けの医薬品情報について解説する。					10月18日	61号館 104室	星 順子	医薬品医療機器総合機構	
	4	治験について	我が国における治験の制度と現状について解説する。					10月25日		樋野 興夫	順天堂大学医学部・大学院医学研究科	
	5	化学発がん研究の系譜とがん哲学	世界を先導した日本の化学発がん研究の歴史をひも解きながら、がんとがん細胞が人間に問いかけているものを論じる。					11月1日		永田 裕子	みずほ情報総研	
化学物質管理と社会	6	化学物質管理と社会	化学物質が社会に役立ってきた歴史、日本の産業における重要性、リスクを社会で管理していく仕組みについて述べる。また、このような仕組みが日本と海外でどう違うか、そこにはリスクに対するどのような考えが影響しているかについて触れる。					11月8日	久保 利晃			
	7	化学物質のライフサイクルにわたる管理(ライフサイクルアセスメント)	天然物も含む化学物質は、電化製品、家具、衣服等、様々な製品に使われており、高機能化に役立っている。と同時に、これらの製品が製造、使用、廃棄されるときに、環境に排出され、人間の健康や生物多様性に影響を及ぼす可能性がある。このようにライフサイクルにわたり、様々な影響を総合的に評価することの重要性が認識されてきた。そのための手法であるライフサイクルインパクトアセスメント(LCIA)について、その方法や企業による化学物質管理への活用事例について紹介する。					11月15日	菅谷 隆夫			
	8	化学物質のライフサイクルにわたる管理(製品含有物質のサプライチェーンでの管理)	化学物質のライフサイクルにわたる管理あるいは製品の環境への配慮のために、近年、電気電子製品や自動車などの組立製品に微量に含有される化学物質が規制されるようになった。長く複雑なサプライチェーンにそって製造される製品に含有される化学物質をどのように管理するのか、関連する法規制と管理の考え方、化学物質に配慮したもののづくりの事例を紹介する。					11月22日	和田 宇生			
農業と食糧	9	中小企業における化学物質管理の実態と支援	日本のものづくりを支えている中小企業に焦点を当て、製造現場の実態とそこでの化学物質管理の状況を事例を交えて紹介する。その上で、これらの中小企業の取組を支援する仕組みについて論じる。					11月29日	山根 義久	日本獣医師会 動物臨床医学研究所		
	10	農業の重要性と食糧自給率	国民の食糧の大半を産出する農業の重要性については、今さら云うべくもない。しかし、日本の現状を見る限り、農業政策によってお金を払って耕作を休ませたり、近年放棄田が増えたり、危機的状況にある。一方、米が余るといいながら76万トンも一年間に輸入している。このような生産者にとってモチベーションが下がる対策が自給率の低下をもたらしている。食料の輸出国が輸出規制をはじめると時代に現状のままではいはいはない。緊急に国民的課題としてとらえる必要について論じる。					12月6日				
危機対応と社会	11	日本の畜産の現状と今後のありよう	食糧の中でも動物性蛋白質の多くを提供してくれる畜産は、国民生活にとっては非常に重要である。しかし、日本の農業全体が激変している中で、畜産はそれ以上に大変な状況におちいっている。人間の食糧は勿論のこと、家畜の飼料の多くを外国に頼っていた日本にとって当然の結果といえる。環境に優しい畜産を模索していく今後のあり方について論じる。					12月13日	土井 幹雄	北茨城市立総合病院 茨城県保健福祉部		
	12	茨城県で経験した健康危機事例への対応	1999年の東海村核燃料施設被爆事故他、東日本大震災も含め、茨城県が経験した代表的な健康危機事例について、私たちが得てきた教訓は何なのか?危機管理の観点から議論してみたいと思う。					12月20日				
企業と社会	13	科学を産業に転化する材料メーカーの挑戦	半導体・自動車関連の高分子材料を得意とする企業が、糖鎖精製微粒子をコア技術にバイオ・ライフサイエンス分野の新規事業開発に挑戦している。高分子材料の機能をいかに“顧客にとって付加価値を持つソリューション”に転化していくか、科学的知見を雇用創出するビジネスに仕上げていくためのマーケティングや技術開発の実践について紹介する。					1月17日	大久保明子	住友ベークライト S-バイオ事業部		
	14	リサイクルによる溶剤供給システムの革新について	リサイクルビジネスは、従来、新品供給が中心となり周辺システムという位置づけであった。リチウムイオン2次電池の製造プロセスで使用される溶剤NMPIに関してはリサイクル中心の供給システムが稼働し始めている。従来のリサイクル概念を全く変えたこのビジネスモデルについて紹介する。					1月24日			川瀬 泰人	日本リファイン 社長
情報と社会	15	情報社会の安全性	情報社会における健全性を損なう種々の課題が存在する。ウイルス、情報漏洩、成りすまし、侵入、プライバシー侵害など、情報セキュリティと呼ばれる種々の問題を整理し、また、広く情報公開、ネットワーク中立性など、健全な情報利用に基づく社会をどう構成していくのかを考える。					1月31日	斎藤 信男	慶應義塾大学名誉教授		